九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[022]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2244531

出版情報：九州人類学会報. 22, 1994-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

序　　文

国際社会とか地球時代という。また、国境を越えた人や文物、情報、貨幣の流通が頻繁になるにつれて、ボーダレス社会になったという言説が世間に広まっている。確かに国際経済は、多国籍企業の増加、生産と消費の国際的な規模での拡大などの現象がとどめようもない勢いでわれわれの面前で展開している。しかし、それは国民国家という政治形態に基づく国境を一時的に越えることはあっても、国境自体はなくなるどころか、一層新しく重要な意味を持ってきているし、国家的枠組みがあるからこそ、日本人がいわゆる円高のメリットによる消費生活を享受することも、またそのデメリットで苦しむことにもなるのである。

問題は、国境の問題というより文明と文明の関係性のあり方だというのが、先ごろ話題になったS・ハンティンフォードの「文明の衝突」(Foreign Affairs, 1993) であったが、本年 (1995年) 1月17日、福岡市内において、クリフォード・ギアーツはこれを「文明の政治学」と題して論じた。彼は福岡アジア文化賞第3回受賞者として1992年に福岡に来て以来、2度目の来福であった。ギアーツを迎えて開かれた「文化人類学フォーラム」(福岡市ほか主催、九州人類学研究会ほか後援) では、彼の講演の後、地元の人類学者や政治学者による討論が新装なった市内舞鶴のアイレフで行われた。

ギアーツの論点は、既存の政治的な枠組みがもはや通用しなくなった現在、世界の全体像を見通すことが困難となってきており、異質性の固まりであるアジアも、多様性の中から一般性を導き出し、そこにアジアとしてのアイデンティティを見いだす必要があるというものであった。

このフォーラムには、本研究会の会員も多く参加しておられたが、このあまりにも有名で、同時にしばしばその発言が問題となっている人類学者を福岡に迎え、限られた時間のなかで交流できたのは本年度の大きな収穫の一つであったと言えようが、彼によって提起された問題は未解決のまま残されている。昨年度は、同じ福岡アジア文化賞大賞を受賞した中国の費孝通博士を囲んで「社会人類学フォーラム」を開催し、やはり九州人類学研究会の会員が中心となって議論を盛り上げた。福岡という地方都市がアジア研究を重視するという姿勢自体は評価すべきである。これまで、C・ギアーツや費孝通の他、中根千枝や川喜多二郎など、人類学関係者が受賞している。九州人類学研究会としては、地方の一研究会として、福岡市のアジア行政に注目しつつ、アジア研究の発展、深化に期待したいところである。

昨年6月の第23回総会において、本研究会の運営委員として、次の方々に参加していただくことになった (五〇音順、敬称略)。上田冨士子、片山隆裕、慶田勝彦、佐々木衛、白土悟、竹沢尚一郎、中西裕二、聶莉莉、服部研二、藤山正二郎、古谷嘉章。本研究会の運営と一層の発展のために、諸委員のご活躍を願うとともに、一般会員の積極的なご支援、ご協力をお願いする次第である。

九州人類学研究会会長

丸　山　孝　一